

# 外国人児童のためのリライト教材・音読譜による 国語科の指導

光元 聰江 ・ 岡本 淑明\* ・ 湯川 順子\*\*

本研究は、外国人児童生徒の学習言語能力の伸長を目指した教科学習という視点から、国語科の学習を容易にするための「リライト教材・音読譜」という教材作成法を考案し、公立小学校の日本語学級において実践したものである。外国人児童（以下、子ども）の日本語力に対応させた国語教科書本文（以下、原文）のリライト教材・音読譜を作成した。そして段階的にリライト教材のレベルをあげ、最終的には、原文をリライトしないで学習できるように指導した。このリライト教材・音読譜を作成するにあたり、学年相当の国語の学習目標と日本語の学習目標の2本柱を立て、現時点での子どもの日本語力に配慮しつつ「表現はやさしく、内容は相当学年レベルで」を目指した。本実践では、編入時、日本語を全く解さなかったK児と日本語入門程度のS児（2名とも中国語母語話者）が、約1年間の上記実践によって、教師の口頭による説明のみで原文がそのまま学習可能となった。

**Keywords**：リライト教材・音読譜，国語科と日本語の指導，学年相当，外国人児童，実践報告

## 1. はじめに

子どもの日本語教育をめぐるには、子どもを成長過程にある一個の人格として様々な視点から総合的に考察し、教育しようという動きが始まっている。その一つが、子どもの学習言語能力の伸長を目指した教科学習という視点である。子どもにとって極めて重要な教科学習、とりわけ日本語への依存度の高い国語科（以下、国語）の学習は非常に困難とされている。

国語をいかに教えるか。先行研究では「教科・母語・日本語相互育成学習」モデル<sup>(1)</sup>、「母語を生かした学習支援モデル事業」<sup>(2)</sup>等での実践研究がある。また、母語話者との協働による国語の授業実践論文として朱（2003）、岡崎他（2002）、清田（2004）等がある。さらに、国語教材作成に関する理論研究では、市毛（2002）の日本人児童向けで、国語の段落指導・論理的思考を育てるリライト教材作成の研究がある。子どもへのリライト教材作成による実践研

究としては、光元（1998b, 2002, 2003a, 2003b）の研究がある。しかし、上記の実践研究は、短期間の指導に留まっており、国語の継続的な指導による児童の学習効果を見るには、不十分である。

本稿では、入国もない児童<sup>(3)</sup>が、リライト教材・音読譜による、ほぼ1年間の継続的指導によって、原文の理解が可能となり、在籍学級の日本人児童と同じワークシートやテストによる学習ができるようになった実践活動を報告する。

## 2. リライト教材・音読譜による国語の学習指導

### 2-1 リライト教材に至る先行基礎研究

「どのような国語の日本語補助教材を作成すればよいか」という視点からの基礎研究として、小学校の国語教科書の分析がある。光元他（1994, 1995, 1996, 1997<sup>(1)</sup>, 1997<sup>(2)</sup>, 1998a）では、小学校国語の日本語補助教材作成資料を得るために、光村図書の小学校国語教科書（1991年版、小学校国語一か

---

岡山大学教育学部学校教育講座 700-8530 岡山市津島中3-1-1

Method of Japanese Language Teaching by Means of Adapted and Oral Raeding Materials for Foreign Schoolchildren  
Tomie MITSUMOTO, Yoshiaki OKAMOTO\* and Junko YUKAWA\*\*

Department of School Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

\*Kibi International University

\*\*Okayama Chuou Elementary School

ら国語六まで)を調査対象とし、本文・課題、物語文・説明文に分けて分析を行っている。文の長さ、接続表現、連体修飾成分、連体修飾成分内の格関係、陳述副詞、「て形」、複文構造等についての調査結果が出されている。これらの基礎研究を踏まえて、光元(1998②)において、リライト教材の試案を提示している。

## 2-2 リライト教材とは

子どもは、日々成長しており、発達段階に応じた教育を保障されなければならない。子どもの認知的な発達に応じた学習を保障するために、入国後の早い時期から該当学年の教科の学習に取り組めるよう

指導の工夫が必要である。その指導法の一つが、表1に示すような「リライト教材・音読譜」<sup>(4)</sup>による教科学習指導である。ここでいうリライト教材とは、子どもの日本語力に合わせた原文の書き換え教材をいう。

リライト教材によって短期間に、在籍学級の級友と同じ教科内容を理解可能にする。それは、子どもの学習意欲の高揚につながっていく。ここにこのリライト教材のもつ教育的な価値がある。子どもの日本語力が上がるに従って、リライト教材の作成レベルも上げていき、いずれは原文がそのまま読解できるように導いていくことを本意とする。

(表1) 原文からリライト教材・音読譜への作成例

<p>(物書) 白いぼうし あまん きみこ 四年上(光村図書)</p> <p>(原文)「これは、レモンのにおいですか。」</p> <p>ほりはたで乗せたお客のしんしが、話しかけました。</p> <p>「いいえ、夏みかんですよ。」</p> <p>信号は赤なので、ブレーキをかけてから、運転手の松井さんにはこうして答えました。</p> <p>リライト教材・音読譜</p> <p>(レベル②) 夏みかんですよ。 (入国6ヶ月程度)</p> <p>「これは、レモンのにおいですか。」</p> <p>タクシードライバーのお客さんは、</p> <p>「いいえ、夏みかんですよ。」</p> <p>夏みかんですよ。」</p> <p>信号は、赤です。</p> <p>(タクシードライバーの松井さんは、)</p> <p>ほりはたで乗せたお客のしんしが、話しかけました。</p> <p>(レベル③) 夏みかんですよ。 (入国6ヶ月程度)</p> <p>「これは、レモンのにおいですか。」</p> <p>川のほとりで乗ったお客のしんしが、話しかけました。</p> <p>「いいえ、夏みかんですよ。」</p> <p>信号は、赤です。</p> <p>ブレーキをかけてから、</p> <p>運転手の松井さんは、</p> <p>こうして答えました。</p>	<p>(物書) 白いぼうし あまん きみこ 四年上(光村図書)</p> <p>(原文)「これは、レモンのにおいですか。」</p> <p>ほりはたで乗せたお客のしんしが、話しかけました。</p> <p>「いいえ、夏みかんですよ。」</p> <p>信号は赤なので、ブレーキをかけてから、運転手の松井さんにはこうして答えました。</p> <p>リライト教材・音読譜</p> <p>(レベル②) 夏みかんですよ。 (入国6ヶ月程度)</p> <p>「これは、レモンのにおいですか。」</p> <p>タクシードライバーのお客さんは、</p> <p>「いいえ、夏みかんですよ。」</p> <p>夏みかんですよ。」</p> <p>信号は、赤です。</p> <p>(タクシードライバーの松井さんは、)</p> <p>ほりはたで乗せたお客のしんしが、話しかけました。</p> <p>(レベル③) 夏みかんですよ。 (入国6ヶ月程度)</p> <p>「これは、レモンのにおいですか。」</p> <p>川のほとりで乗ったお客のしんしが、話しかけました。</p> <p>「いいえ、夏みかんですよ。」</p> <p>信号は、赤です。</p> <p>ブレーキをかけてから、</p> <p>運転手の松井さんは、</p> <p>こうして答えました。</p>
--	--

### リライト教材作成の視点とその種類

上述の光元の基礎研究には、国語の日本語補助教材作成において配慮すべき点がいくつか提案されている。その中から本稿の実践研究において、リライト教材作成の視点として取り入れたものを以下に述べる。( )内は、関連する光元論文の出版年、号を示す。

- (1) 文の長さは、使用頻度の高い3～5文節を中心とする。(1994, 97号)
- (2) 「て形」は、アスペクト・「て形接続」を最初から導入する。(1995, 99号)
- (3) 接続表現を含む文のうち、①接続詞的表現では、順接・逆接・累加を、②接続助詞的表現では、順接、逆接、並列をまず導入する。(同上)
- (4) 連体修飾成分では、①連体修飾成分を1件含む文を、②連体修飾成分の長さ(文節数)は、1・2文節からなる短いものを、③連体修飾成分中の核関係は、1～2件含むものを中心に導入する。(同上)
- (5) 学習者の単文から複文への理解を容易にする

ために、1文中に名詞修飾節<sup>(5)</sup>をふくまず、接続節<sup>(6)</sup>を1個含む文の複文構造を「つなぎ言葉(接続詞)」を用いて理解させることに習熟させ、より拡大化していく文型への適応を容易にさせる。(1997②・106号, 1998・107号)

以上のような基礎研究を参考にし、原文の内容を重視したリライト教材を作成する。

筆者は、日本語学級や学生ボランティア等での6年間の支援活動の中で、表2に示すようなリライト教材作成方法を試みてきた。作成の留意点としては、在籍学級での学習内容に見合うリライト教材を作成することである。「表現はやさしく、学習内容は相当学年レベルで」がリライト教材作成の重要なポイントである。子どもの日本語レベル、日本滞在期間、日本語学級での授業時間数等を考慮に入れ、子どもが学習可能で、達成感を持てるような教材を作成する。

作成の手順は、まず、国語の学年相当の学習目標と日本語の学習目標を決定することである。次に、それに合わせて原文の内容を重視し、子どもの日本

語レベルに合わせたリライト教材を作成する。その後、音読譜を作成し、ワークシートやテストによって各レベルでの学習成果を確認しながら国語の学習をすすめていく。

(表2) リライト教材の種類と作成方法 (表中の「原文」とは、教科書本文の意)

種類	作成方法
①口頭リライト教材	読む力はないがお話レベルなら理解可能という子ども対象の口頭によるリライト教材。やさしい表現で語り聞かせるように、また絵、紙芝居、VTRなどの視覚的教具を併用して原文をわかりやすく理解させることが必要。「表現はやさしく内容は相当学年レベルで」が大切。
②要約リライト教材	原文の要約を子どもの日本語レベルに合わせてリライトする方法である。要約リライト教材は、日本語レベルが低く、長文の教材の指導が無理な場合などに使用できる。分かち書きをすると読みやすい。その場合音読譜を使用することにより、音読と内容理解を重視したリライト教材が作成できる。
③あらすじリライト教材	原文(物語など)のあらすじをリライトした教材である。日本の歴史、文化、地理などの理解が滞在期間等によって異なるので、語彙の書き換えには、子どもに合わせた工夫が必要となる。その単元での必須語彙は、リライト教材で繰り返し使用し、自然に覚えられるように工夫する。
④全文リライト教材	原文すべてを子どもの日本語レベルに合わせてリライトする。授業時間が十分取れる場合に適している。授業後、原文をよく読ませ、リライト教材と原文との対応をさせると、より効果的である。
⑤ポイント教材	リライト教材の中に、ポイントとして重要段落や会話文等を原文のまま挿入する方法である。全文を原文で読ませたいが、時間も取れないし、まだ少し荷が重いという場合に適している。
⑥注釈リライト付教材	原文を、リライトしないで、理解の困難な語彙や表現についてのみ噛みくだいたリライト注釈を付け、原文の理解を助けるようにする。少しの助けがあれば、在籍学級での授業参加が可能な日本語レベルの子どもに適している。原文を音読譜にして、口頭による注釈によって読解させるのも効果的である。

### 2-3 音読譜とは

音読譜とは、日本語の文章を音声化するとき、どう読むかを、視覚的に表そうとするものである。音読譜の原型は、短歌にある。短歌は、普通、下の句を下げて書く。時には、五七五七七を、分かち書きすることもある。これは、短歌の詩形よりも朗詠(音読)を意図したものであろう。これを、現代文に応用し、「音読譜」と命名した。

古典における読みを意識した分かち書きについては、いろいろな人が試みている。例えば杉澤(2004)では、「枕草子」の分かち書きを示している。しかし、日本語教育で目指すのは、芸術的な朗読法ではなく、日本語の理解・読解、また音声化を指導する手段である。読み手によって、さまざまに変化する読み方、それに対応する音読譜も、当然変わってくる。しかし、文章を意味なりに伝えようとする、そこには高く始めて、低く終えるという、一つの型(音調)が存在する。それを、行換え・行頭の高さの違い・分かち書き等によって、視覚化しようとするのである。作成の手順は以下のようである。

- (1) 文章を、文単位で縦書きにする。
- (2) それを、文節を意識して分ける。意味なりの接続関係をはっきりさせるために、直接続くものは1行に、そうでない場合は行換えをする。
- (3) 以下の点に留意して文を整える。
  - ① 離れている連用修飾語の後では、行換えをする。

- ② 長い連体修飾部は、音読しやすいように行換え・分かち書きをする。
- ③ 文全体を支える述語は、わかりやすさという面から行換えをするとよい。
- ④ 各行の頭を右上から順次左下がりにする。

リライト教材を音読譜に変換することによって、視覚的にやさしい日本語に見える。原文のままで指導に入る最終レベルでは、一挙に原文読解は、抵抗があるが、原文の音読譜によって読みの練習を行えば、子どもへの原文重圧感を和らげることができる。

### 3 リライト教材・音読譜のレベル

リライト教材・音読譜は、それぞれにレベルを設けている。表3には、それらのレベルと学習開始時期の目安を示した。学習者の認知レベルは、母国での学習状況、入国後の学習歴等を参考に判断している。

表中のリライト教材のレベルは、いわゆる日本語文法の構造シラバスによるレベル分けではなく、次第に原文の表現に近づけていくリライト教材作成過程をレベルとして示している。学習開始時期の目安として、「レベル1」は、日本語では、まだ口頭表現ができない段階、すなわち教師の指示は分かり、リピートはするが、自分からは、しゃべらない段階、「レベル2」は、会話がある程度でき、自分から日本語をしゃべるようになる段階、「レベル3」は日

常会話がほぼ支障のない段階程度を想定している。「レベル4」は、原文音読譜のみで学習可能な段階を示す。音読譜のレベルについては、表中に示した通りである。音読譜の「レベル1」では、日本語学習を始めて間のない子どもに、日本語の言葉のまとまりに慣れさせるために、文節単位で区切った音読譜で学習させる。「レベル2」は、レベル1よりも意味のまとまりを考慮して、数個の文節をまとめて区切った音読譜である。「レベル3」は、レベル2よりも、さらに意味内容を重視して区切りを大きく

した音読譜である。すなわち、レベル1からレベル3へと文の分かち書きの区切りをしだいに大きくして、意味のまとまりを意識した自然な日本語の読み近づけていこうとするものである。また、音読譜では、行換え・行頭の高さ等で、音読するときの自然な音調を視覚的に示している。したがって、音読練習の際には、行換え・行頭の高さにそって音読すれば、日本語の自然な音調が身につくように工夫してある。

(表3) リライト教材・音読譜のレベルと学習開始時期の目安

リライト教材の種類	入 門	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
①口頭リライト教材	○*				
②要約リライト教材		○ 音1	○ 音2		
③あらすじリライト教材		○ 音1	○ 音2	○ 音2	
④全文リライト教材			○ 音2	○ 音2	
⑤ポイント教材		○ 音1	○ 音2	○ 音2	
⑥注釈リライト付教材					○ 音3
学習開始時期(目安)	2.3ヶ月	3・4ヶ月	5~7ヶ月	8~10ヶ月	1年前後

・表中の「学習開始時期(目安)」は、母国では相当学年に在学中であった日本語未習状況の学習者が、リライト教材・音読譜によって学習を開始する場合の時期の目安を示す。

・「レベル」とは、入門、レベル1からレベル3へと、しだいに細やかな読みができるように状況説明、語彙・表現などをより詳しくし、しだいに原文の表現に近づけていくリライト教材作成過程をレベルとして示したものである。レベル4は、原文のままリライトせず、音読譜によってのみ学習するレベルを示す。原文の内容表現を重視するため、必ずしも厳密な構造シラバスはとっていない。

・文中○は、各レベルで使用するリライト教材を示し、\*は、口頭のみによる学習のため音読譜を使用しない意。

・表中の「音1」は、「文節単位で分かち書きをした音読譜」、「音2」は、「意味のまとまりを考慮した分かち書きの音読譜」、「音3」は、「意味のまとまりを考慮した音読譜」を意味する。

#### 4 実践活動の概要

本稿の実践研究では、2003年11月から2004年11月までのうち実質約1年間の活動を報告する。これは、公立小学校(0校)の日本語学級で実施したリライト教材・音読譜による国語の指導についてである。この日本語学級には、2004年11月現在で5人の児童が通級していた。指導者は、専任の教員と学生ボランティアである。いずれの児童も国語のリライト教材・音読譜を使用し効果的であった。本稿では、これらの児童のうち、中国人児童2名(4年生、K児・S児)について、指導の実際を報告する。

K児は、3年生の11月末(2003年)に編入した。留学生である母親の日本語力は高いが、父親及びK

児は、入国当時全く日本語を解さなかった。S児は、3年生の2月(2004年)に台湾より編入してきた。母親の日本語力は、日常会話レベルで、S児は、編入前に数ヶ月の日本滞在があり、家庭でひらがなの大体と日常会話の基本は身に付けていた。二人とも家庭での使用言語は母語である。いずれも母国では、正規の学校教育を受けており、編入時に課した算数の計算問題の解答結果から推し量ると、学年相当の認知力があると判断された。リライト教材・音読譜による段階的指導の結果、約1年で、国語の原文をリライトすることなく、原文のまま理解可能となり、在籍学級と同じワークシートやテストによる学習ができるようになった。

#### 4-1 本実践における教材作成の視点及び日本語項目導入例

本実践活動では、リライト教材作成の視点（2-2参照）及び音読譜作成の留意点（2-3参照）に基づいてリライト教材・音読譜を作成した。その際、表3の「学習開始時期」を目安とし、リライト教材・音読譜のレベルを子どもの実態に合わせて作成し

た。表4は、本実践でのリライト教材作成時の日本語項目導入例を示した。これは、上述の作成の視点及び原文の内容を重視しつつ、少しずつ原文に近づいていけるようリライト教材・音読譜のレベルを工夫するなかで、導入した日本語項目の例を示している。

（表4）リライト教材作成時の日本語項目導入例（レベル別）（3・4年生）

日本語項目	入門	レベル1	レベル2	レベル3
生活日本語	○			
文の長さ (1文中の文節数)		3文節の文が中心	5文節の文が中心	5文節の文が中心
単文		○	○	○
接続表現		て(順次)	と, ので, とき, ながら	ば, て(因果), たり
アスペクト		ている, てくる	てきた, (てある)	てしまう, ていた
授受表現			くれる, てくれる	あげる, もらう
接続詞		でも	それで, そこで, そして, また	ところが, それから, すると
複合動詞		○	○	○
原文中のキーワードの導入		○	○	○
語彙 表現	動作化・視聴覚化できるもの	○		
	ことばで説明可能なもの		○	○
	その他抽象的なもの			
連体修飾成分	1件含むもの	大きい木	○	○
	2件含むもの		かわいい白いぼうし	戦争に行く人
副詞		とても, 少し	こっそり, はっきり	あまり・・・ない
学習レベルに合わせて提示する慣用句的表現		実がなる, 十日たつ	願いがかなう, おなかがすく	ため息をつく
オノマトペ		ぺこぺこ	にこにこ, せかせか	キャッキャッ, ぬるぬる
フィラー(よ, ね等)		○	○	○
文体		敬体	原文と同じ文体	原文と同じ文体

- ・本表の各レベルの日本語項目は、○小学校で使用したリライト教材中に表われた項目を例として示した。
- ・表中の○は、その項目がリライト教材に使用されたことを示す。
- ・「レベル4」は、学習者の理解できない語彙や内容理解に必要な情報を与え、原文音読譜のみで学習するため、本表には示していない。

#### 4-2 K児・S児への指導の実際

子どもたちが、来日間もない時期から在籍学級の日本人児童の学習進度に合わせて、同じ教材内容の学習をすることは、子どもの学習意欲や思考力の発達に不可欠である。そこで、編入約3か月後からリライト教材・音読譜による指導を開始した。

K児への指導の実際では、まず、ひらがなと『日本語学級1』（凡人社・大蔵守久著）を学習させた。1か月弱で約20時間取り出して指導した。さらに、『日本語学級2』（凡人社・大蔵守久著）を23課まで学習後、3年生の2月より在籍学級の進度に合わせたリライト教材・音読譜による指導を行った。4

年生の11月現在、会話力は日常生活には支障がなく、国語の教科書の物語文や説明文は、原文をリライトせず学習できるようになった。

S児への指導の実際は、基本的な指導の流れはK児と同じである。しかし、編入時ひらがなの大體を読み書きでき、基本的な会話表現も習得していたため、日本語学習の定着が早く確実であった。『日本語学級2』を13課まで学習後、4年生の5月から在籍学級の進度に合わせたリライト教材・音読譜による指導を行った。リライト教材に出てくる未習の文型は、その都度『日本語学級2』より取り出して指導した。4年生の11月現在、日常生活に支障の

ない会話力があり、国語の教科書をリライトせず、原文のまま学習できるようになった。

#### 4-3 リライト教材・音読譜による指導の過程

リライト教材・音読譜による指導を、在籍学級の学習進度に合わせて行った。その進度に合わせた学習単元と国語・日本語の指導目標、目標達成のための児童の学習活動、評価のためのワークシート・テスト等の結果について、論文末の付表にまとめた。

K児では、編入約3か月後に、「モチモチの木」のリライト教材を使用して指導を行った。日本語力としては、聞いたことの大体が分かる。リライト教材の種類としては、要約リライトである。国語の目標は、指導要領に準じた。具体的には、「登場人物（豆太）の気持ち」を考えさせた。まず、初めに、日本語の文章の理解を助けるために、原文の母語訳を読ませた。物語の内容が理解できた段階で、リライト教材の学習に入った。また、教科書の挿絵は数が少なく、理解の助けとしては不足しているため、絵本の挿絵を使い理解の助けとした。リライト教材を、音読させたり、視写をさせたりして、理解を深め日本語力をつけさせた。理解が難しいと思われる単語は、母語に訳した。豆太の気持ちは、母語で書かせ、後日、日本語訳をノートに書き込ませた。日本語の書き込みが後日になったのは、母語話者である留学生に日本語訳を依頼したためである。さらに、各場面を学習したあと、母語で物語の続きを考えさせた。物語の内容をよく理解して、自分なりの考えを持って取り組めた。母語の力とリライト教材を有効に活用することによって、3年生に必要な思考をさせることができた。また、リライト教材をすらすら音読したり、正しく視写したりできるようになった。

4年生の最初の教材「三つのお願い」では、簡単なワークシートを使用し、自分の思ったことを日本語で表現させた。自分の考えがスムーズに日本語で言えるようになってきたことを踏まえての学習内容である。リライト教材の種類としては、あらすじリライトである。登場人物はどんな人か、自分の三つの願いは何かを日本語で書くことができた。口頭で自分の考えを言わせたあと、ひらがなで書くように助言した。また、会話部分の読み方も、男の子の言い方と女の子の言い方の違いを理解し、読み分けることができた。さらに、テストの答え方に慣れさせるため、リライト教材を使用したテスト問題を作成した。解答結果を点数で評価したところ、学習の更なる意欲付けとなった。

5月には、「ツバメがすむ町」の学習をした。初めての説明文の学習である。このリライト教材も、

あらすじリライトである。この教材でも「モチモチの木」と同様に、母語訳を初めに読ませて、学習の助けとした。国語の目標を達成するため、文の中で大切な語は何かを考えさせ、さらに、文と文の関係にも注意させ、段落意識を持たせながら学習させた。自分の力で文中の大切な言葉を見つけ、段落を意識しながら学習ができた。しかし、段落相互の関係を理解することはできなかった。また、国語の教科書学習に必要な授業用語（例：文・ことば・段落など）も習得できるよう意識して指導した。教科の授業用語を理解させておくことは、在籍学級での学習をスムーズにするために非常に重要である。

6月には、「白いぼうし」の学習をした。リライト教材の種類は、全文リライトである。国語の目標としては、「文学的文章における物語の山場はどこかを考えながら読み、大切な部分をとらえることができる」ということである。つまり、女の子は蝶が化けたのだ、ということをとらえられるかどうか、ということである。また、日本語の目標としては、積極的な口頭表現や、大人と子どもの言葉遣いの違いが分かることなどである。この教材では、初めに母語訳は読ませずにリライト教材のみでの学習を行った。理解が難しいと思われる場面では、絵で表したり、具体物（ぼうし・ちょう・石など）を使ったりして、理解を助けた。リライト教材での学習が終わった段階で、物語の理解の確かめのために、母語訳を読ませた。母語訳を読ませた後の第一声は、「ああ、やっぱり。」であった。リライト教材で学習した内容を母語で確認でき、納得できたのだと思う。この時期には、日本語での表現力も豊かになり、連体修飾表現も使えるようになった。また、在籍学級の日本人の子どもと同じテストをさせたところ、大変意欲的に取り組み、テストで問われていることの大体を答えることができた。この教材の学習では、日本語そのものの理解だけでなく、物語を読むことによって、場面を想像することができるようになった。

9月になり、「一つの花」の学習をした。この時期には、日常会話は支障がなく、自分の考えを十分に伝えられるようになった。リライト教材の種類としてはポイント教材である。理解可能な部分はなるべくリライトしないで、原文のまま教材を作成した。国語の目標は、「物語の情景を想像し、作品をより深く味わうことができる」である。そのために、リライト教材での学習後、原文の音読譜を読ませた。ワークシートへの書き込みもスムーズにできるようになり、在籍学級と同じテストを自分の力で解けるようになった。

11月には、「体を守る仕組み」の学習をした。リライト教材は使わず、原文音読譜のみでの学習をした。ワークシートも、指導書・別冊のものを使用した。通常、クラスで使用するものと同じ内容である。非常に意欲的に学習に取り組み、在籍学級と同じテストをしたところ、自力で8割正解することができた。

上記のように、K児は編入時全く日本語を解さなかったが、編入後約11か月で、原文をリライトすることなく理解できるようになり、ほぼ在籍学級の児童と同じ学習が可能となった。

次にS児の指導について述べる。S児は、編入時基本的な会話とひらがなの読み書きを身に付けていた。リライト教材の使い方や学習の仕方は、基本的にはK児と同じである。編入3か月後からリライト教材での学習を始めた。

5月の「ツバメがすむ町」の学習が最初である。リライトの種類は、要約リライトである。母語訳を読ませて、内容を理解させてから、リライト教材の学習に入った。分かりにくい言葉は、その都度母語で示した。また、1文ごとに、日本語と母語を対応させ、理解させていった。文中の大切な言葉はどれかを意識して文を読み取ることができた。音読もすらすらでき、正しく視写することができた。リライト教材を使ったテストにも意欲的に取り組むことができた。

6月には、「白いぼうし」の学習をした。リライトの種類は、あらすじリライトである。この時期には、自分の考えを日本語でスムーズに言えるようになった。国語としては、この物語の不思議さ（蝶が女の子に化けたこと）に気付かせるために、正確に文を読み取らせることを目標とした。母語は、リライト教材学習後に与えた。日本語のみによる理解で、物語の不思議なところに気付くことができた。また、日本語の目標である、複文や連体修飾表現を理解し、使うこともできた。

9月には、「一つの花」の学習をした。リライト教材の種類は、全文リライトである。国語としては、物語の情景を想像し、作品を深く味わうことを目標とした。主な場面で、お父さんやお母さんの気持ちを考えて、ふきだしに書くことができた。また、リライト教材を使ったテストを正確に解くことができたようになった。

11月には、K児と同様に、教材をリライトすることなく、原文音読譜のみで学習した。この時期には、日常会話は支障がなく、自分の考えを日本語で言えるようになった。意欲的に学習に取り組み、原文を理解することができた。在籍学級と同じテスト

を自力で解き7割正解できた。

K児よりS児の方が、原文での学習が早い時期に行えたのは、編入時の日本語力の差が影響していると思われる。

## 5 考察

リライト教材・音読譜を使用した指導によって、どのような成果が得られたかについて考察する。

国語の教科学習において、在籍学級の授業についていけるには、数年かかるといわれている。しかし、子どもの日本語力に合わせてリライト教材のレベルを変えていくことによって、日本語力が未熟でも学年相当の国語としての思考が可能となった。また、日本語未習児が約1年間で、少しの助けがあれば、原文の読解ができるようになったという点は、リライト教材・音読譜を使用した成果であるといえる。

リライト教材による指導の成果を以下に述べる。まず、子どもが、教師の指示をだいたい理解できるようになった頃（編入約3か月）に、要約リライト教材による指導を開始した。この時、在籍学級で学習している教材と同じ教材をリライトして学習させる。そうすると、子どもの知的満足感を高める効果がある。子どもが教材の内容を大まかにつかむことができる。リライト教材を音読したり、視写したりすることによって、国語の学習言語としての日本語に慣れることができる。また、漢字の習得においても、文章の中で使われている漢字を無理なく体得させることができる。

また、リライト教材での学習のやり方が分かり、文章がスムーズに理解できるようになった段階で、あらすじリライトを使った学習をさせる。あらすじリライトは、要約リライトよりも状況説明部分を多く含んだリライト教材であるため、より詳しく物語の情景を読み取ったり、中心となる語や文をとらえて文章を読んだりすることが学習目標となる。自分の考えを書くこともスムーズにできるようになり、ワークシートを使った学習や、リライト教材を使ったテストができるようになった。この時期になると、在籍学級での学習にスムーズに移行できるように、国語の学習に必要な授業用語の導入も開始した。

そして、日本語力が高まってきたので、全文リライトを使って学習させた。この段階になると、文そのものの意味理解だけではなく、文中の言葉から情景を想像したり、物語の山場を読み取ったり、より深く作品を味わうことが学習目標となる。ワークシートやテストも在籍学級と同じものを使って学習することが可能となり、在籍学級での学習にまた一歩近づく。

さらに、ポイント教材で学習させた。理解可能な範囲で原文そのまま学習し、負担が重い部分のみリライトする教材である。ポイント教材での学習後、原文を読ませることにより、子どもの原文学習への負担感が軽くなる。原文の使用部分によっては、もっと早い時期からポイント教材を使うことができる。例えば、会話部分だけ原文のまま学習できるようにリライトすることもできる。

最後は、原文音読譜を使つての学習である。個別指導ではあるが、在籍学級とほぼ同じ学習が可能となり、在籍学級と同じテストを自力で解くことができるようになった。

以上のように、学習単元を在籍学級の進度に合わせて進めていくことで、子どもの学習意欲や知的満足感を高めることができた。クラスのみならず同じ学習をしているということが、子どもの精神的な安定にもつながった。

音読譜による指導の成果を述べる。音読譜も、リライト教材の変化に伴って変えていった。要約リライトでは、文節ごとに細かく分けて音読譜を作成した。音読や意味理解を容易にするためである。しかし、リライト教材のレベルが上がるのに伴って、音読譜も内容理解を重視して、文中での語句のまとまりを1区切りとして示した。音読譜の示すとおりを読めば、内容理解が容易になるよう音読譜の作成を工夫した。その結果、複文や連体修飾表現の理解が容易になった。

母語訳の使い方についての成果を述べる。本実践では、母語訳を効果的に使用でき、学習に有効であった。母語訳の使い方はいろいろあり、状況によって使い方を工夫することが大切である。リライト教材での学習を開始したばかりの時期では、リライト教材の学習前に先行学習として母語訳を与えると、教材内容が分かった上で、リライト教材に取り組める。リライト教材中に少し難しい表現が出てきても、内容を類推することができ、スムーズに学習を進めることができる。また、母語訳とリライト教材を並行して使用すると、確実に文や言葉を理解しながら学習を進めることができる。リライト教材のレベルが上がったときなどに有効な方法である。また、リライト教材での学習後、母語訳を読ませると、どのくらい日本語を理解できるようになったかが自己評価でき、自信をつけることにつながる。かなり日本語力がついてきた段階で、有効な方法である。

以上のように、リライト教材及び音読譜のレベルと母語訳の使い方を工夫し、子どもの日本語力に合わせて、バランスよく連動させながら学習させることによって、学習効果を高めることができた。

## 6 おわりに

リライト教材・音読譜を使用することによって、子どもの日本語力に応じて学年相当の国語の学習をさせることができた。しかし、在籍学級で一斉授業を受けることは簡単ではない。個別指導で理解できることが、一斉指導では理解困難となる。今後は、どのような手立てで在籍学級で一斉授業を理解させ得るかを考えていかなければならない。また、国語以外の教科指導についても、子どもの日本語力に応じた学年相当のリライト教材の作成研究が必要であると感じている。さらに、言葉のハンディを克服して、その子どもがもつ潜在的な学力を最大限引き出してやることできているのかという懸念が付きまとう。今後は、これらの課題に向き合っていきたい。

謝辞：本稿の執筆にあたり、貴重なご意見をいただきました岡山県日本語教育研究会の会員である岡本拓雄、粟井佳江、阿部喜恵子、阿部加奈子の各氏に感謝の意を表します。

## 注

- (1) これは岡崎敏雄が提唱しているモデルで、教科・母語・日本語の三者を相互に関連させながら育成することを目指している。
- (2) 横浜市国際交流協会（YOKE）が、実施しているモデル事業で子どもの母語ができるボランティアが学校で先生とペアになって子どもの学習を支援する実践である。
- (3) 本稿では、母国において相当学年に在学中であった日本語未習及び入門レベルの学習者を対象としている。
- (4) リライト教材は光元聰江、音読譜は岡本淑明によって考案された教材作成法である。
- (5) ここでの名詞修飾節とは、いわゆる連体修飾節と「か」節を含んでいる。
- (6) ここでの接続節は、並列的な関係や副詞的な関係で主節に結びついている節をいう。

## 引用・参考文献

- (1) 市毛勝雄（2002）『国語力を育てる言語技術教育入門』、明治図書、20-44。
- (2) 岡崎敏雄（1995）「年少者言語教育研究の再構成—年少者日本語教育の視点から—」『日本語教育』86号、日本語教育学会、1-12。
- (3) 岡崎眸・清田淳子・原みずほ・朱桂栄・小田珠生・袴田久美子（2002）『『教科・母語・日本語相互育成学習』は日本語学習言語能力の養成に有効



- か」  
[http://members.at.infoseek.co.jp/ocha\\_larp/sankoshiryu.htm](http://members.at.infoseek.co.jp/ocha_larp/sankoshiryu.htm)
- (4) 清田淳子 (2004) 「母語を活用した内容重視のアプローチの試み— 来日直後の外国人児童を対象に」『人間文化論叢』第6巻お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- (5) 杉澤陽太郎著・NHK放送研修センター 日本語センター編 (2004) 『現代文の朗読術実践編』NHK出版, 36.
- (6) 朱桂栄 (2003) 「教科学習における母語の役割— 来日まもない中国人児童の『国語』学習の場合—」『日本語教育』119号日本語教育学会, 75-84.
- (7) 光元聰江・三宅ちぐさ (1994) 「外国人児童のための日本語補助教材作成をめざして— 小学校国語教科書の分析—」『岡山大学教育学部研究集録』第97号, 47-64.
- (8) 光元聰江・三宅節子・田中洋子 (1995) 「小学校国語教科書と日本語テキストにおける『て形』分析— 日本語補助教材作成資料として—」『岡山大学教育学部研究集録』第99号, 29-46.
- (9) 光元聰江・三宅節子 (1996) 「文学教材にあらわれた接続節について— 小学校の日本語補助教材作成資料として—」『岡山大学教育学部研究集録』第102号, 277-289.
- (10) 光元聰江・三宅節子 (1997①) 「説明文にあらわれた名詞修飾節について— 小学校の日本語補助教材作成資料として—」『岡山大学教育学部研究集録』第104号, 157-166.
- (11) 光元聰江・三宅節子 (1997②) 「文学教材にあらわれた複文構造について— 小学校国語の日本語補助教材作成資料として—」『岡山大学教育学部研究集録』第106号, 157-164.
- (12) 光元聰江・三宅節子 (1998a) 「説明文にあらわれた複文について— 小学校国語の日本語補助教材作成資料として—」『岡山大学教育学部研究集録』第107号, 141-150.
- (13) 光元聰江・三宅ちぐさ (1998b) 『日本語を母語としない児童を教科学習に入りやすくさせるための日本語テキスト作成』平成7年度～9年度 文部省科学研究費補助金 [基盤研究 (C) (2)] 成果報告書 (課題番号: 07680311) (研究代表者光元聰江), 79-100.
- (14) 光元聰江 (2002) 「子どもの成長を支援する日本語教育— 日本語と国語との関連指導を通して—」『岡山大学教育学部研究集録』NO.121, 133-142.
- (15) 光元聰江・室山朱美・小林真里子 (2003a) 「日本語力の異なる外国人生徒への国語指導」『岡山大学教育学部研究集録』NO.122, 151-161.
- (16) 光元聰江・藤原康弘 (2003b) 「初期日本語教育におけるリライト教材による教科学習の可能性— 外国人児童への学習支援に関する縦断的実践報告—」『岡山大学教育学部研究集録』NO.123, 147-154.
- (17) 横浜市国際交流協会 (YOKE) (2004) 『平成15年度「母語を生かした学習支援モデル事業」報告書』横浜市国際交流協会 (YOKE).

付表 リライト教材・音読譜による指導目標・学習活動及び成果 (表中の○は、K児に対応したものである。◎は、S児に対応したものである。●は、K児・S児共通のものである。)

単元 (リライトの種類) (母語訳の有無)	指導の目標		児童の主な学習活動 (ワークシート・テスト等を使って)	児童の学習の達成度 (学習の成果)
	国語科の目標 指導要領3～4年より	日本語指導の目標		
モチモチの木 (○要約リライト レベル1) (3年生・2月) (母語訳有り)	○場面の移り変わりや情景を、想像しながら読むことができる。 ○縦書きの文章に慣れる。 ○複文(テ形)に慣れる。	○すべてのひらがなが確実に読み書きができ、リライト教材中の漢字(3年生までの配当漢字400字のうち45字)も読め、視写ができる。 ○縦文(テ形)に慣れる。	○初めに、母語訳のモチモチの木を読む。 ○リライト教材を音読する。 ○リライト教材を視写する。 ○物語の続きを想像して書く。	○リライト教材をすらすら音読したり、正しく視写したりでき、縦書きの文章に抵抗がなくなった。 ○意欲的に学習し、物語の内容をよく理解し、物語の続きを母語で書けた。 ○登場人物はどんな人か簡単な日本語で書けた。(簡単な連体修飾表現を使用) ○会話部分の読み方を工夫して音読できた。 ○自分の三つの願いを日本語で書けた。 ○リライト教材を使ったテストの問題に意欲的に取り組んだ。
三つのお願い (○あらすじ リライト レベル2) (4年生・4月) (母語訳無し)	○正確に文章を読みとり、物語の感動的な場面をとらえることができる。 ○中心となる語や文をとらえて、段落相互の関係を調べて、読み取ることができる。 ◎中心となる語をとらえて、文を読むことができる。	○個々の音、単語、文を繰り返し練習し、正しく発音できる。 ○リライト教材中の漢字(61字)を読み視写できる。 ○男子と女の子の話し方(会話体)の違いが分かる。 ○連体表現(～と、たら、ながら)に慣れる。 ○運体修飾表現を理解できる。	○会話部分の読み方の工夫の仕方を考える。 ○登場人物はどんな人かワークシートに書く。 ○物語を読んで、自分の三つの願いを書く。 ○リライト教材を使ったテストにより、テストの答え方を練習する。	○登場人物はどんな人か簡単な日本語で書けた。(簡単な連体修飾表現を使用) ○会話部分の読み方を工夫して音読できた。 ○自分の三つの願いを日本語で書けた。 ○リライト教材を使ったテストの問題に意欲的に取り組んだ。 ○自分で、文中の大切な言葉を見つけれられるようになった。 ○段落を意識しながら学習できた。が、段落相互の関係を理解するにはいたらなかった。 ○リライト教材を使ったテストを解けるようになった。 ○複文や連体修飾表現を理解することができたが、使うまでにはいたらなかった。 ○文中の大切な言葉を意識して学習できた。 ○リライト教材を、すらすら音読し、正しく視写できた。 ○リライト教材を使ったテストに意欲的に取り組んだ。
ツバメがすむ町 (○あらすじ リライト レベル2) (○要約リライト レベル1) (5月) (母語訳有り)	○文学的文章における、物語の山場はどこか考え、読むことができる。 ◎正確に文章を読み取り、読み手にとつて大切な部分をとらえることができる。	◎国語科の教科学習に必要な専門語彙を習得する。(文・ことば・段落など) ○複文(～と、～たら、～ても、引用)の表現に慣れる。 ○運体修飾表現の表現を理解し使うことができる。 ○すべてのひらがなが確実に読み書きができ、リライト教材中の漢字(50字)を読め、視写ができる。 ◎複文表現(～と、テ形)に慣れる。 ◎運体修飾表現を理解できる。	◎初めに、母語訳を読み、内容を理解する。 ○リライト教材の各文ごとに、大切な言葉を見つけて、ワークシートに書き出し、段落のまとまりを意識する。 ○リライト教材を使ったテストの問題を解く。 ○リライト教材の各文ごとに、大切な言葉は何かを気をつけて読む。 ○リライト教材を使ったテストにより、テストの答え方を練習する。	○自分で、文中の大切な言葉を見つけれられるようになった。 ○段落を意識しながら学習できた。が、段落相互の関係を理解するにはいたらなかった。 ○リライト教材を使ったテストを解けるようになった。 ○複文や連体修飾表現を理解することができたが、使うまでにはいたらなかった。 ○文中の大切な言葉を意識して学習できた。 ○リライト教材を、すらすら音読し、正しく視写できた。 ○リライト教材を使ったテストに意欲的に取り組んだ。
白いぼうし (○全文リライト レベル3) (○あらすじ リライト レベル2) (6月) (母語訳有り)	○文学的文章における、物語の山場はどこか考え、読むことができる。 ◎正確に文章を読み取り、読み手にとつて大切な部分をとらえることができる。	◎物語を読んで思ったこと、分かったことを、積極的に口頭で表現することができる。(会話表現) ●大人と子どもたちの言葉の違いが分かる。(表現) ●オノマトペ表現が理解できる。(にここに、せかせか) ◎複文(～ので、～たら)の表現に慣れる。 ◎運体修飾の表現を理解し、使うことができる。	○場面ごとに、登場人物・時間の移り変わり・場所の分かる言葉をワークシートに書く。 ○登場人物はどんな人かワークシートに書く。 ○在籍学級のテストと同じ問題を書く。 ○登場人物の動きを、ワークシートに書く。 ○リライト教材を使ったテストの問題を解く。	○この物語の面白さ、不思議さを母語に頼らず、日本語で読み取り、読み取った内容を教師に伝えることができた。(母語は、後行学習) ○登場人物はどんな人か、連体修飾表現を使って書けた。 ○在籍学級と同じテストに、意欲的に取り組めた。 ○複文や連体修飾表現を理解し、使うことができた。 ○リライト教材を使ったテストを解けるようになった。
一つの花 (○ポイント教材 レベル3) (○原文音読譜) (○全文リライト レベル3) (9月) (母語訳有り)	○物語の情景を想像し、作品をより深く味わうことができる。 ◎物語の情景を想像し、作品を深く味わうことができる。	○リライト教材での学習後、原文音読譜の内容を読み取ることができる。(日本の歴史・戦争中の日本の様子を理解できる。) ●登場人物の気持ちは、複文で書くことができる。(引用表現・原因理由)	●主な場面で、お父さんやお母さんの気持ちになってせせりふを書く。 ○戦争中と十年後の場面をくらべてワークシートに書く。 ○在籍学級のテストと同じ問題を書く。 ○リライト教材を使ったテストの問題を解く。	●登場人物の気持ち、複文を使って、ふきだしに書くことができた。 ○物語の情景を的確に読み取り、ワークシートに書くことができた。 ○在籍学級と同じテストを解くことができた。 ○リライト教材を使ったテストを、正確に解けるようになった。
体を守る仕組み (○原文音読譜) (11月) (母語訳無し)	●文章の内容の中心をとらえたり、段落相互の関係を考えたたりしながら、読むことができる。	●リライト教材を使わず、原文音読譜で学習できる。 ●原文を注意深く読み、ワークシートに必要な内容を書くことができる。 ●在籍学級と同じ内容の学習が、個別指導でできる。	●原文を読んで理解した内容を、ワークシート(教師用指導書・別冊)に沿って書き、理解を深める。 ●在籍学級でのテストと同じテストをする。	●意欲的に学習に取り組み、個別指導で、在籍学級とほぼ同じ内容の学習ができた。 ○在籍学級と同じテストを自分の力で解き8割正解できた。 ◎在籍学級と同じテストを自分の力で解き7割正解できた。